

○最優秀賞（中央大会・奨励賞）

「生きているだけで百点満点。」

宮崎市立久峰中学校 三年 田代 紗友里

「障害者なんかいなくなればいい」

平成二十八年七月二十六日、障がい者施設に入所していた十九名の命を犠牲にした犯人が発した言葉である。「あれから一年・・・。」という報道で再び耳にしてしまった言葉は私にとって最大の凶器である。何故なら、私は犯人がいう「障害者」の一人だからだ。

私は、生まれつき「脳性麻痺」で特に左足が自由に動かない。歩くことも、走ることもできるが「みんなにとって当たり前のこと」ができない自分に、はがゆさを噛みしめたり「みんな」への憧れを抱いたりすることが、度々あった。そんな中、「甘えるなー」、「強くなりなさい。」と言って厳しく育ててくれている家族、「みんな」と同じように接してくれる友人、学校で支えて下さるアシスタントの先生、それから「頑張れ！」とエールを送って下さる地域の方々などの暖かい存在がいつもそばにあった。それだけでなく、何事に対しても「無理だからやめとく？」と言わず「きっとできる！やってみる？」と言って沢山の勇気とチャンスを与えてくれた。おかげで「みんなにとって当たり前のこと」が「自分にとっての当たり前」といえるようになり、その度に自分に自信を持つことができた。

小学五年生の夏から冬の間、足の手術のため障がい者施設に入所すると共に支援学校に転校した。そこには重度の知的障がいや脳性麻痺を抱えていて、車椅子や寝たきりの生活を送る人が沢山いた。嬉しい時やおもしろい時は思いっきり笑い、悲しい時は精一杯涙を流し、怒った時は顔を真っ赤にして怒り、一生懸命自分の気持ちを伝えようとする姿がそこにあった。

けれど、偏見はその気持ちをわかってはくれない。

「障害者の安楽死を国が認めてくれないので自分がやった。」

ネットでは犯人をヒーロー視する人も少なくなかった。

「人に危害を加える重度障害者に人権なんて与えなくていい。」

「犯人は、税金を食い潰すだけの奴らを処分した英雄。」

私は、悔しさと悲しさで胸が一杯になった。生まれた時、あるいは生きている上で「健常者」と身体の何処かが違えば分類されてしまうのだ。

私を生んで麻痺が発覚した時、母は

「この子を殺して私も死ぬ。」

と言ったそうだ。母が「障がい者」を抱えた親であり、私が「障がい者」である以上、偏見と戦わなければいけないことを母は見ずえて言ったのだと思う。しかし、家族は私の存在を隠すことはしなかった。お店や遊園地に連れて行ってくれた両親や祖父母、「俺の妹」「うちのお姉ちゃん」といって自分の友達に紹介した兄や妹、恥ずかしかったり勇気が必

要だったりしたと思う。それから最近、授業で進路について考えることが増えたが、障がいを抱えている以上就職先も限られてくることを知った私は、今まで夢を与えてくれていた沢山の存在の有り難さに気付いた。

「生きているだけで百点満点。」

中学一年の時、性教育の講師を務めた助産師の方が教えて下さった言葉である。まさにその通りだと思う。あの十九名の命は処分されるために生まれたんじゃない、人権を与えなくていい人間など何処にもいない、一生懸命生きるために生まれたのだ。

公共施設や街中にポスターや看板で「障がいの壁をなくそう」とか「思いやりのある世の中を」という標語がうたわれているが、将来そんなポスターや看板がなくなるくらい障がいを抱えた人たちが過ごしやすい世の中になって欲しい、そして、「生きているだけで百点満点」という言葉を誰もが胸に抱いて、一日、一日を大切に生きて欲しいと思う。